

論文概要

未就学児を育てる母親の就労と家庭生活の両立の実態

～キルギス共和国ビシュケクにおける聞き取り調査を中心に～

有澤律子

研究の目的と方法

本論文は、キルギス共和国（以下、キルギス）の首都ビシュケクで働きながら未就学児の子育てをしている母親を取り巻く就労環境・育児環境・人的ネットワークを明らかにし、母親たちがどのように就労と家事育児を両立して暮らしているのかを明らかにすることを目的に執筆された。

持続可能な開発目標の中でジェンダーの平等の実現が謳われているが、2030年までの目標達成は難しい状況にあり、特に雇用分野における男女の格差は大きく、その一因として、女性が無償の家事労働やケアワークに費やす時間の軽減が進んでいない事が指摘されている。

本研究で対象とするキルギスは、1990年のソビエト連邦（以下、ソ連）崩壊に伴って独立し、民主主義国家として法整備を進めた。その結果、中央アジア諸国の中で最もジェンダー格差が小さいと評される法律を策定したが、この法律と慣習や伝統との間には乖離があり、紙の上で述べられるジェンダーの平等が実際には達成されていない事も指摘されている。

筆者は2020年1月～2024年3月までの間、独立行政法人国際協力機構（以下、JICA）の職員としてキルギスで勤務および随伴家族として滞在した。筆者が勤務していた首都にある職場では、16人のキルギス人スタッフが勤務していたが、その内9人が子育て中の母親であり、子供を育てながら就労するキルギス人の母親は、筆者にとって身近な存在であった。

しかしながら、キルギス人女性を取り扱った先行研究は保守的な価値観の中で生きる女性に焦点を当てたものが多く、都市部で子供を育てながらフルタイムの被雇用者として働くキルギス人女性の生活の実態を明らかにするものは確認できなかった。

そのため、これまでに明らかにされていない多様なキルギス人女性の一旦端を明らかにすることを目的に本研究を行う事とした。具体的には、キルギスの女性の中でも比較的自由的な選択肢を持つと推察される都市に暮らす高学歴層の母親への聞き取りを通じて、母親たちがどの様に就労と家事育児を両立しているのか、今なお残る制約や困難にはどのようなものがあるのかを考察することとした。

論文の構成

第1章 論文の概要

第1節 研究の背景と問題の所在

第2節 研究の目的

第3節 研究の方法

第4節	論文の構成
第2章	女性の就労の機会拡大に関する動向と課題
第1節	世界の潮流
第2節	旧ソ連諸国の傾向
第3節	キルギス共和国の現状
第3章	キルギスの未就学児を持つ母親の就労に関連する課題と支援
第1節	統計から見る母親の就労に影響を与える要因
第2節	働く女性の出産・育児に関する法律
第4章	キルギスの未就学児を持つ母親を取り巻く社会的特徴
第1節	伝統的価値観に基づく社会規範
第2節	首都ビシュケクの暮らし
第3節	文献調査で得られた問いと聞き取り調査の方向性
第5章	聞き取り調査の概要と結果
第1節	調査概要
第2節	調査方法
第3節	調査対象者
第4節	調査結果
第1項	調査対象者の語り
第2項	7つの問いに対する回答
第6章	全体考察
第1節	キルギスの伝統的価値観に基づく社会規範
第2節	都市部に特有の環境
第3節	母親が抱える葛藤と自負
第4節	まとめ
第7章	結論
第1節	結論
第2節	残された課題

参考文献

謝辞

論文の概要

本論文は7つの章で構成され、文献調査と聞き取り調査を基に考察を行った。

第1章では本論文の研究背景と問題の所在、目的、方法、論文の構成について述べた。

第2章では女性の就労機会拡大に向けた動向と課題について、世界の潮流、旧ソ連諸国の傾向、キルギス共和国の現状という順に、マクロからミクロへ焦点を絞りながら論述した。

第1節では、女性の就労の機会拡大に関する世界の潮流として、1990年代以降、男女平等の法整備が進み、就労人口の男女差も小さくなった点を述べた。また、働く母親を取り巻く

社会や家庭の環境、母親が抱える葛藤などについて論じた先行研究に触れ、国や地域を越えて共通の課題として言及されている事柄を整理した。第2節では、旧ソ連諸国に共通して見られるジェンダー規範の特性とその背景にある歴史、ソ連時代からソ連崩壊後の女性を取り巻く就労の状況の変遷、そして世界の潮流と比べた際の差異について述べ、旧ソ連諸国では「男は仕事、女は家」という考えが根強く支持されていることを示した。第3節ではキルギスの現状を明らかにするために、独立から現在に至るまでの就労環境の変遷と現在の就労者数の男女比、その背景にある要因について述べた。

第3章では、キルギスの未就学児を持つ母親の就労に関連する課題と支援について、統計や法律を基に検討した。第1節では、働く母親の生活に関わりの深いものとして、生活水準、基礎教育及び高等教育の充足率、保育施設を含む未就学児教育施設へのアクセス状況、平均初婚年齢、初産の平均年齢について述べた。第2節では、キルギスの労働法の中から、働く女性の出産・育児に関する箇所を抽出し、諸外国の労働法と比較分析することでその特徴を示した。

第4章では、第1節でキルギスにおけるジェンダー役割や家族、伝統的価値観に基づく社会規範について論述した後に、第2節で本研究の対象地域である首都ビシュケクの特性を示した。そして最後の第3節では、論文の目的を明らかにするために有効となる7つの問い（①伝統による制約、②制度と実態の乖離、③子供の預け先、④都市部の特色、⑤家事と育児の両立、⑥母親の葛藤、⑦母親の自負）を整理し、第5章の聞き取り調査への導入とした。

第5章では、聞き取り調査の概要と結果について、調査概要、調査方法、調査対象者、調査結果の順に第1節から第4節に分けて述べた。特に調査結果を示す第4節では、第1項で各人の語りの中から、筆者が問いに対するヒントになると考えた内容を記載し、第2項で7つの問いごとに語りをまとめた。語りを再度概観したところ、複数の問いに紐付けられる回答が見られたことに加え、インタビューを通じて問い同士の類似性も確認されたため、6章の考察では、7つの問いを「キルギスの伝統的価値観に基づく社会規範（問い①②③）」「都市部に特有の環境（問い①②③④⑤）」「母親が抱える葛藤と自負（問い⑤⑥⑦）」の3つのグループに再整理し、そのどれかもしくは複数に紐づけて整理することとした。

第6章では、データや先行研究に基づく議論と聞き取り調査結果の双方を引用しながら、本論文の目的に沿って全体考察を行った。まず、第1節から第3節で、3つのグループごとの考察を行い、続く第4節で全体のまとめを記載した。第1節ではキルギスの伝統的価値観に基づく社会規範が就労する母親に対してどのような影響を与えているのかについて、就労に対する周囲（家族）の反応、就労に際する権利の取得状況、就労に際する子供の預け先と言った切り口で考察を展開した。第2節では第1節の問いに加えてビシュケクの母親を取り巻く家庭環境に主眼を置きながら考察を展開した。第3節では母親が抱える自負と葛藤についての考察を展開した。最後の第4節では、第3節までの内容を纏めて総合的な考察を行った。先行研究で指摘されていた通り、都市部に暮らす高学歴層の母親は、夫や家族による制約が比較的少なく、就労や出産育児について自身の希望を叶えることが一定程度可能

であることが確認された。一方で、家族の反対によって就労出来ない母親も居る事が分かり、夫や近親者によって与えられる「あるべき母親の像」は、就労を希望する母親にとって今でも残る課題の一つであると推察された。産休育休といった権利の取得については、公務員、大学職員、開発援助機関職員等では取得が容易である一方で、私企業の場合には就労環境が取得を許さないために、退職せざるを得ない事が分かり、取得の可否は地域性というよりも雇用主の属性によるところが大きいと考えられた。また働く母親たちは、社会や家族から求められる母親としての役割に加えて就労者としての責任も果たしており、その他の就労者や就労しない母親よりも多くのプレッシャーを抱えているが、他者よりも多くの責務を担っているという事実は母親の自信にもつながり、子どもの存在や夫の理解は母親を物理的にも精神的にも支えていることが分かった。

最後の第7章では結論を述べた。これまでの研究では着目されることが少なかった層、すなわち伝統的価値観に基づく社会規範の影響を受けにくいと推察される都市に暮らす高学歴層の母親への聞き取りを通じて、母親たちがどの様に就労と家事育児を両立しているのか、今なお残る制約や困難には何があるのか、就労と家事育児の両方を担う事で感じる葛藤や自負は何かを考察し、母親たちが自身の在り方をどのように捉えているのかについて、実態の一端を明らかにすることが出来た。しかしながら、今回の調査対象者は筆者の知り合い及び知り合いの知り合いまでに限定されており、広くビシユケク一般の状況を把握できたとは言えない。そのため、よりランダムに抽出した対象者への聞き取りを行うことが今後の課題である。